

伊藤左千夫

姪子



姪

子

麦搗むぎつきも荒あらましになつたし、一番草も今日でお終しまいだか
 ら、おとツつあん、熱いのに御苦勞だけつと、鎌を二三
 丁買つてきてくるっだいな、此この熱い盛りに山の夏刈なつがりもや
 りたいし、畔草あぜくさも刈つねばなんねい……山刈りを一丁に
 草刈りを二丁許ばかり、何処どこの鍛冶屋かじやでもえいからつて。
 おやじがこういうもんだから、一と朝起きぬきに松尾
 へ往いつた、松尾の兼鍛冶かねが頼みつけで、懇意だから、出
 来合があつたら取つてくる積りで、日が高くなると熱く

てたまんねから、朝飯前に帰ってくる積りで出掛けた、おらア元から朝起きが好きだ、夏でも冬でも天氣のえい時、朝っぱらの心持ったらそらアえいもんだからなア、年をとってからは冬の朝は寒くて億劫おっくうになったけど、其その外ほかん時には朝早く起きるのが、未いまだにおれは楽しみさ。それで其朝は何んだか知らねいが、別けて心持のえい朝であつた、土用半ばに秋風が立って、もう三回目で土用も明けると云う頃だから、空は鏡のように澄んでる、田のものにも畑のものにも夜露がどつぶりと降りてる、其涼しい気持ったら話になんなつかった。

腰まで裾を端しよつてな、素すつ膚足ばだしに朝露のかかるのはえいもんさ、日中焼けるように熱いのも随分つれいな、其熱い時でなけりや又朝っぱらのえい気持ということもねい訳だから、世間のことは何でもみんな心の持ちよう一つのもんだ。

それから家の門を出る時にや、まだ薄暗かったが、夏は夜明けの明るくなるのが早いから、村のはずれへ出たらもう畑一枚先の人顔が分るようになった、いつでも話すこつたが、そんな時おれが、つくづく感心したのは、そら今ではあんなに仕合せをしてる、佐兵エどんの家内よ、

あの人がたしか十四五の頃だな、おれは只遠い村々の眺めや空合の景色に気をとられて、人の居るにも心づかず来ると、道端に草を刈ってた若い女が、手に持った鎌を措おいて、

「お早ようございます」

と挨拶したのを見るとあの人さ、そんなころ善吉はまるつきり小作づくりであつたから、あの女も若い時から苦勞が多かつた。

村の内でも起きて居た家は半分しか無かつた、そんなに早いのに、十四五の小娘が朝草刈りをしているのだも

の、おれはもう胸が一ぱいになった位だ。

「おう誰かと思ったら、おちかどんかい、お前朝草刈をするのかい、感心なこったねい」

おれがこう云って立ち止まると、

「馴れないからよく刈れましね、荒場のおじいさんもたいそうお早くどこへいきますかい」

そう云って莞爾にっこり笑うのさ、器量がえいというではないけど、色が白くて顔がふっくりしてるのが朝明りにほんのりしてると、ほんとに可愛い娘であった。

お前とこのとツつあんも、何か少し加減が悪いような

話だがもうえいのかいて、聞くと、おやじが永らくぶらぶらしてますから困っていますと云う、それだからこうして朝草も刈るのかと思つたら、おれは可哀そうでならなかつた、それでおれは今鎌を買いに松尾へ往くのだが、日中は熱いからと思つてこんなに早く出掛けてきたのさ、それではお前の分にも一丁買ってきてやるから、折角丹誠してくれやて、云つたら何んでも眼をうるましたようだった、其時のあの女の顔をおれは未だに覚えてる、其の後、家のおやじに話して小作米の残り三俵をまけてやった、心懸けがよかつたからあの女も今はあんなに仕

合せをしてる。

これでは話が横道へ這入った、それからおれが松尾へ
往きついてもまだ日が出なかった、松尾は県道筋につい
て町めいてる処へ樹木に富んだ岡を背負ってるから、
屋敷構やしきがまえから人の気心も純粹の百姓村とは少し違ってる、
涼しそうな背戸山では頻りにしき 蝸ひぐらし が鳴いてる、おれは又
あの蝸の鳴くのが好きさ、どこの家でも前の往来を綺麗きれい
に掃いて、掃木目ほうきめの新しい庭へ縁台を出し、隣同志話し
ながら煙草など吹かしてる、おいらのような百姓と変ら
ない手足をしている男等までが、詞ことばつかいなんか、

どことなし品がえい、おれはそれを真似ようとは思わな
いけど、横芝や松尾やあんな町がかった所へいくと、住
居の様子や男女の風俗などに気をつけて見るのが好き
だ。

兼鍛冶のそこへ往つたら、此節は忙しいものと見えて、
兼公はもう鞆場ふいごばに這入って、こうこうと鞆の音をさして
居た、見ると兼公の家も気持がよかった、軒の下は今掃
いた許りに塵ちり一つ見えない、家は柱も敷居も怪しくかし
げては居るけれど、表手おもても裏も障子を明放あけはなして、畳の上
を風が滑ってるように涼しい、表手の往来から、裏庭の

茄子なすや南瓜かぼちやの花も見え、
 胯頭けいとう鳳仙ほうせん花か天竺てんじく牡丹ぼたんの花などが
 背高く咲いてるのが見える、それで兼公は平生花を作る
 ことを自慢するでもなく、花が好きだなどと人に話し為
 たこともない、よくこんなにも花を絶やさずに作っ
 てますねと云うと、あアに家さ作って置かねいと時折仏
 様さ上げるのん困るからと云ってる、あとから直ぐこう
 いう鎌が出来ましたが一つ見ておくんせいと腕自慢の話
 だ、そんな風だからおれは元から兼公が好きで、何でも
 農具はみんな兼公に頼むことにしていた。

其朝なんか、よつぽど可お笑かしかつた、兼公おれの顔を

見て何と思つたか、喫驚びつくりした眼をきよろきよろさせ物も云わないで軒口へ飛んで出た、おれが兼さんお早ようと詞を掛ける、それと同んなじ位に、

「旦那何んです」

とあの青白い尖とんがりぐち口の其のたまげた顔をおれの鼻っさ

きへ持つてきていうのさ、兼さん何でもないよ鎌を買いに来たんだよ、日中は熱いから朝っぱらにやって来たのさ、こういうと、「そらアよかつた、まア旦那お早ようございます」と直ぐにけろりとした風で二つ三つ腰をまげた、ハハハアと笑つたかと思うと直ぐ跡から、旦那鎌

なら豪せいなのが出来てます、いう内に女房が出て来て
上がり鼻へ花^{はなむしろ}塵を敷いた、兼公はおれに許り其塵へ腰
をかけさせ、自分は一段低い縁に腰をかけた、兼公は職
人だけれど感心に人に無作法なことはしなかつた。

「旦那聞いてください、わし忌ま忌ましくなんねいこと
があつですよ、あの八田の吉兵エですがね、先月中あな
た、山刈と草刈と三丁宛^{ずつ}、吟味して打つてくれちもんで
すから、こつちやあなた充分に骨を折って仕上げた処、
旦那まア聞いて下さい其の吉兵エが一昨日来やがって、
村の鍛冶に打たせりや、一丁二十錢ずつだに、お前の鎌

二十二錢は高いとぬかすんです、それから癩しやくに障さやつち
やっただんですから、お前さんの錢やお前さんの財布へし
まっておけ、おれの鎌はおれの戸棚へ終しまつて措おくといっ
て、いきなり鎌を戸棚へ終しまつちやっただんです、旦那えい
処へ来て下さった」そういうて兼公は六丁の鎌をおれの
前へ置いた、女房は、それではよくあんめい、吉兵工さ
んも帰りしなには、兼さんの一酷にも困る、あとで金を
持たしてよこすから、おつかアおめいが鎌を取つとい
くつだいよって、腹も立たないでそういつていつたんだ
から、今荒場の旦那へ上げて終しまつてはと云った、兼公は

あアにお前がそういうなら、八田の分はおれが今日にも打って措くべい、旦那どうぞ持っていて下さい、外の人と違う旦那がいるってんだから、こういうから四丁と行って往つたのだが、其六丁を持ってきた、家を出る時心持よく出ると其日はきつと何かの用が都合よくいくものだ。

思いの外に早く用が足りたし、日も昇りかけたが、蝸はまだ思い出したように鳴いてる、つくつくほうしなどがそろそろ鳴き出してくる、まだ熱くなるまでには、余程の間があると思って、急に思いついて姪子の処へ往つ

た。

お町が家は、松尾の東はずれでな、往来から岡の方へ
余程経上って、小高い所にあるから一寸見ても涼しそう
な家さ、おれがいくとお町は二つの小牛を庭の柿の木の
蔭かげへつな繫いで、十になる惣領そうりょうを相手に、腰巻一つになっ
て小牛を洗ってる、刈立ての青草を籠かごに一ぱい小牛に当
てがって、母子がさも楽しそうに黒白斑まだらの方のやつを
洗ってやってる、小牛は背中を洗って貰って平気に草を
食ってる、惣領が長い柄ひしやくの柄杓ひしやくで水を牛の背にかける、
母親が縄たわしで頻りに小摺こすってやる、白い手拭てぬぐいを間深

かに冠^{かぶ}って、おれのいったのも気がつかずにやってる、表手の庭の方には、白らげ麦や金時大角豆などが庭一面に拡げて隙間もなく干してある、一目見てお町が家も此頃は都合がえいなと思うと、おれもおのずと気も引立って、ちっと手伝おうかと声をかけた。

あらア荒場の伯父さんだよって、母子が一所にそういつて、小牛洗いはそこそこにさすが親身の挨拶は無造作なところに、云われないなつかしさが嬉しい、まア伯父さんこんな形では御挨拶も出来ない、どうぞまア足を洗って下さい、そういうより早く水を汲んでくれる、おれ

はそこまで来たから一寸寄つたのだ上つてる積りではねいと云つても、伯父さん一寸寄つていくつてそら何のこつたかい、そんなこと云つたつて駄目だ、もうおれには口は聞かせない。

上つて見ると鏡のように拭いた摺縁すりえんは歩りくと足の下がぎしぎし鳴る位だ、お町はやがて自分も着物を着替て改つた挨拶などする、十になる兎の母だけけれど、町公町公と云つたのもまだつい此間の事のように、其大人ぶつた挨拶が可笑しい位だった、其内利助も朝草を山程刈つて帰つてきた、さっぱりとした麻の葉の座蒲団を影の映

るような、カラ縁に敷いて、えい心持ったらなかつた、伯父さん鎌を六丁買ってきて、家でばつかそんなにかいちもんだから、おれがこれこれだと話すと、そんなら一丁家へもおくんなさいなという、改まって挨拶するかと思うと、あとから直ぐ甘えたことをいう、そうされると又妙に憎くないものだよ。

あの気転だから、話をしながら茶を拵こしらえる、用をやりながらも遠くから話しかける。

「ねい伯父さん何か上げたくもあり、そばに居て話したくもありで、何だか自分が自分でないようだ、蕎麦そば餛飩うどん

でもねいし、どじよう鱒の卵とじ位ではと思つても、ほんに伯父さん何にも上げるもんがねいです」

「何にもいらねいっち事よ、朝っぱら不意に來た客に何がいるかい」

そういう所へ利助もきて挨拶した、よくまア伯父さん寄てくれました、今年は雨都合もよくて大分作物もえいようでなど簡単な挨拶にも実意が見える、人間は本気になる、親身の者をなつかしがるものだ、此の調子なら利助もえい男だと思つておれも嬉しかった、お町は何か思いついたように夫に相談する、利助は黙々うなずいて、

其のまま背戸山へ出て往った様だった、お町はにここに
しながら、伯父さん腹がすいたでしようが、少し待って
下さい、一寸思いついた御馳走をするからって、何か手
早に竈かまどに火を入れる、おれの近くへ石臼いしうすを持出し話し
ながら、白粉しろこを挽ひき始める、手軽気軽で、億劫な風など
毛程も見せない、おれも訳なしに話に釣り込まれた。

「利助どんも大分に評判がえいからおれもすっぴん安心
してるよ、もう狂あばれ出すような事あんめいね」

「そうですよ伯父さん、わたしも一頃は余程迷ったか
ら、伯父さんに心配させましたが、去年の春頃から大へ

ん真面目になりましたね、今年などは身上しんしやうもちつとは残りそうですよ、金で残らなくてもあの、小牛二つ育てあげればって、此節は伯父さん、一朝に二かつぎ位草を刈りますよ、今の了簡りやうけんでいってくれればえいと思いますがね」

「実の処おれは、それを聞きたさに今日も寄つたのだ、そういう話を聞くのがおれには何よりの御馳走だ、うんお前も仕合せになった」

こんな訳で話はそれからそれと続く、利助の馬鹿を尽した事から、二人が殺すの活いかすのと幾度も大喧嘩おおげんかをやつ

た話もあった、それでも終いには利助から、おれがあやまるから仲直りをしてくろて云い出し誰れの世話にもならず、二人で仲直りした話は可笑しかった。

おれも始めから利助の奴は、女房にやさしい処があるから見込みがあると思つていた、博打ぼくちをぶつても酒を飲んでみだ、女房の可愛い事を知つてる奴なら、いつか納まりがつくものだ、世の中に女房のいらねい人間許りは駄目なもんさ、白粉は三升許りも挽けた、利助もいつの間にか帰つてる、お町は白粉を利助に渡して自分は手輕に酒の用意をした、見ると大きな巾着きんちやく茄子を二つ三つ

丸ごと焼いて、うまく皮を剥いたのへ、花鱈はながつおを振って醤油をかけたのさ、それが又なかなかうまいのだ、いつの間になんな事をやったか其の小手廻しのえいことと云ったら、お町は一苦労しただけあつて、話の筋も通つて人のあしらいもそりや感心なもんよ。

す tons す tons 音がすると思つてる内に、伯父さん百合餅もちですが、一つ上つて見て下さいと云うて持つて来た。

何に話がうまいつて、どうして話どころでなかつた、積つても見ろ、姪子甥子おいごの心意気を汲んでみる、其餅のまずかろう筈があるめい、山百合は花のある時が一番味

がえいのだそうだ、利助は、次手ついでがあるからって、百合餅の重箱と鎌とを持っておれを広福寺の裏まで送ってくれた。

おれは今六十五になるが、鯛平目たいひらめの料理で御馳走になった事もあるけれど、松尾の百合餅程にうまいと思つた事はない。

お町は云うまでもなく、お近でも兼公でも、未だにこれを大騒ぎしてくれる、人間はなんでも意気で以て思合つた交りをする位楽しみなことはない、そういうとお前達は直ぐとやれ旧道德だの現代的でないのと云うが、今

の世にえらいと云われてる人達には、意気で人と交わる
というような事はないようだね、身勝手な了簡より外な
い奴は大きな面をしていても、真に自分を慕って敬してく
れる人を持てるものは恐らく少なからう、自分の都合許
り考えてる人間は、学問があっても才智があっても財産
があっても、あんまり尊いものではない。

(明治四十二年九月)

日本文学電子図書館

野菊の墓

著 者：伊藤左千夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館